準備講座❷

説明的文章の読み方

実力テストや入試では、初めて目にする文章を、限られた時間内に読んで理解し、解答しなければならない。文章のどこに、どのようなことが書かれていたかをすぐに確かめられるように、目印を付けながら読む練習をしてみよう。

◇キーワードをつかむ！

何度も繰り返し出てくる言葉は、文章の話題や筆者の考えに関係がある。

◇**原因・理由をチェック！**
・なぜなら…
・…から
などに注意して、筆者の考えの根拠をつかむ。

◇**接続語をチェック！**
接続語の働きに着目すると、論の展開を捉えやすい。

◇**問いや主張の表現をチェック！**
筆者が強く訴えかけようとしていることを捉える。

文章の話題を示す

「身のほど」などということばは、最近はほとんど使われなくなってしまいました。理由なぜなら、身のほどを知る、ということは、自分の身分に甘んじることであり、それは*封建社会の身分制度が生みだした屈辱的な考え方であって、支配者に都合のいい*モラルだと思われるようになったからです。まとめて言い換えつまり、「身のほど」という日本語には、あまりにも多くのマイナスのイメージがまつわりついてしまったのです。

たしかに「身のほど」の「身」を、「身分」と受けとれば、そうした身分などという封建的な観念は捨て去るべきでしょう。しかし、それを社会的な「身分」ではなくて人間的な「自分」だと考えれば、身のほどを知るということは、じつに大切なことと言えないでしょうか。私は「身のほど」ということばを、この意味で使いたいと思います。

話題が変わるところで、そのような「身のほど」を考えるとき、私はいつもイソップを思いだすのです。というのは、あの『イソップ物語』に語られているさまざまな*寓話のほとんどが、「身のほど」について教えているからです。

イソップが教える「身のほど」とは

寓話

——亀が鷲のように飛んでみたいと思い、鷲に飛ぶことを教えてください、と頼みました。「お前さんには、そんなことはむりだ」と鷲は忠告したのですが、亀はどうしても飛びたいと言ってききません。そこで鷲は亀を爪でぶらさげ、空高く飛んで放したので、亀は岩に砕かれて死んでしまいました。

「身のほど」に合わない志

身をほろぼす

こうした寓話は、読みようによっては、たいへん不愉快になるかもしれません。「空を

・文章全体にわたって、「身のほど」という言葉が繰り返し出てくる。
・題名も「身のほどについて」である。
→話題＝「身のほど」について

1〜9行
・まず、「身のほど」という言葉の一般的なイメージを示し、それと異なる筆者の考えを示す。
・「たしかに〔一般論・予想される反論〕……しかし〔筆者が主張したいこと〕」（6〜9行目）の形に注目すると、筆者の考えをつかむことができる。
《筆者の考え》「身のほどを知る」とは、人間的な「自分」を知ることであり、大切なことである。
・「しかし」「けれども」など逆接の接続語の後には問いかけや主張の表現が多い。

10〜29行
・転換の接続語「ところで」（10行目）から話題が変わり、『イソップ物語』の寓話を用いて「身のほど」について考えを深める。
・「〔読者の反感〕かもしれません。〔読者の

◇たとえ話・具体例をチェック！
わかりやすく説明するために例を挙げている。

◇指示内容をチェック！
指示語が何を指しているかを確かめ、文のつながりを正しくつかむ。

◇語句の意味と読み方をチェック！
辞書を引く習慣をつけよう。辞書を読むだけでなく、調べた言葉を覚えて、少しずつ言葉の力を蓄えよう。

飛ぶということは鷲だけに許された行為であり、それを亀が望むのは身のほどを知らなすぎる」と言われれば、自分を亀のように思っている人は、けっしていい気持ちはしないでしょう。

けれどこの話を、大きな志を捨てて、分に甘んじよ、というふうに解する必要はぜんぜんないのです。なぜなら（理由）、この寓話は、こんなぐあいに裏返して考えることもできるからです。（後を指している）

立場を入れ替えた寓話

――鷲が亀のように水にもぐってみたいと思い、亀にもぐり方を教えて欲しいと頼みました。「あんたには、そんなことはむりだ」と亀は忠告したのですが、鷲は、どうしても水にもぐってみたい、と言ってききません。そこで亀は鷲の肢をくわえて水に引きこみ、深い水底で放したので、鷲は水に溺れて死んでしまいました。

「身のほど」に合わない志

まとめて言い換え

つまり、イソップが教えているのは、見当ちがいの大志は身をほろぼす、ということなのです。そして、見当ちがいというのは、「身のほど」、すなわち（言い換え）自分の個性を知ろうとしないところから生まれる、ということです。

筆者の考え

志というものは、あくまで自分に密着していなければなりません。言いかえれば、自分とは何か、おのれの個性とはいかなるものか、それを不断に問いつづけることにより、はじめて、自分にとっての正しい志が立てられるのです。その志が正しければ、志は、たとえどんなに高くても、自分を向上させてくれるでしょう。げんに兎と亀の駆けっくらの話がそれを語っています。

けれど、自分を顧みることのない無鉄砲な志は、その人を破綻させてしまうことになります。「身のほどを知る」というのは、「自分を正しく知る」ことにほかならないのです。

〈森本哲郎『愛蔵版　ことばへの旅』所収「身のほどについて」より〉

※一部省略等があります。

（注）封建社会＝身分や階級などによる上下の区別を重んじる社会。　モラル＝道徳。
寓話＝教訓を含むたとえ話。　駆けっくら＝駆けくらべ。かけっこ。

反感」でしょう。けれど［筆者が主張したいこと］。なぜなら［主張の根拠］」（17～22行目）という形で、予測できる反論に対する筆者の考えを述べる。

《筆者の考え》イソップの寓話は、「大きな志を捨てて、分に甘んじよ」と言っているのではない。

・二つの寓話からわかることを「つまり」（27行目）以降でまとめて述べる。

《筆者の考え》イソップの寓話は「見当ちがいの大志は身をほろぼす」と教えている。見当ちがいは、自分の個性（＝身のほど）を知ろうとしないことから起こる。

30～36行
・ここまでの説明を踏まえて筆者の考えを述べ、文章をまとめる。

《筆者の考え》「身のほどを知る」とは、「身分に甘んじる」という意味ではなく、「自分を正しく知る」ということである。自分の個性を知れば、正しい志を立てて自分を向上させることができる。

筆者の主張
身のほどを知るとは自分を正しく知ること。

◇題名をチェック！
キーワードや文章の話題、筆者の考えをつかむ手がかりになる。